

明夏

ながればし

息を詰め

瞬きさえ惜しみながら

夜空を見張っていた

「流れ星が流れるあいだに

願い事を三度唱えれば叶う」

と信じていた

流れ星は星の最期だと

星の死にゆくさまだと

知ったのは

いつだったろう

今この瞬間に

この世から消えゆく星に

煩惱を願うなど

あつかましくはなかったか

唱えるべきは感謝だった

もしかしたら

その星の生涯で

もっとも美しく

もっとも輝く

最期の瞬間を

見送らせてもらえたのかもしれない